

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

ネットワーク

Network

NO.365 2020年

4月号

特集

市民がつくる スポーツ・コミュニティ

セルフヘルプという力 第23回
難病の制度と支援の谷間を考える会
生活の困りごととして考える視点を

思い立ったがボラ日
日本語グループ WAIWAI
外国人の人たちの日本語学習支援

いいもの みい~つけた! vol.24
社会福祉法人つむぎ おだまき工房
【裂き織り】を主とした1点物!!

TVAC News vol.5
企業ボランティアの祭典 2020



日本語グループ WAIWAI



忘年会。写真提供=日本語グループ WAIWAI

思い立ったが ジツ ボラ日

このコーナーでは、毎回一つの団体取材し、活動内容やそこで活動するボランティアさんの生のお声を届けます。

「～さんは、若い人です。～さんは元気な人です」手書きの絵カードと共に日本語を讀み上げるボランティアさんから真剣に学ぶ学習者の方々。今回は「日本語グループ WAIWAI」の活動に参加させていた

週に1回「わいわい」できる場所

日本語グループ WAIWAI は1993年に創設された、日本で暮らす外国の方々の日本語学習を支援するボランティアグループ。毎週土曜日の午前中に飯田橋を拠点として活動している。

クラスレッスンとプライベートレッスンを組み合わせた授業で学習者のニーズに応じている。クラスレッスンは、初級から上級まで全5クラスに分かれた、グループレッスン。クラス毎にレッスンスタイルは異なり、毎週ローテーションで担当者が



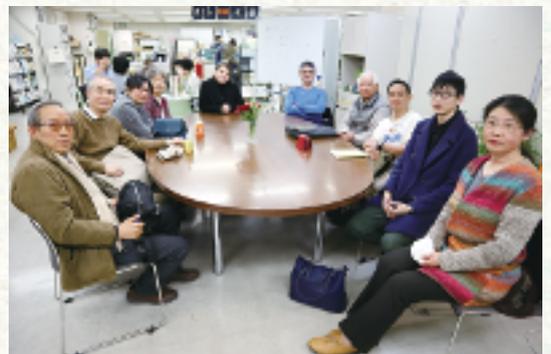
ボランティアの方々と代表の日野岳さん（右）。

レッスンをやっている。レッスンはボランティア1人に対して学習者1～2人程度で行っている。参加した学習者の国籍や年齢性別は様々。教えるボランティアは毎回異なるが、オリジナルカリキュラムに沿って進められている。今回の上級クラスは「ウィルス」がテーマ。テーマは担当するボランティアによって毎回異なる。勉強になるお話に、思わず聞き入ってしまう。

続けていけるボランティア

代表の日野岳さんは、代表になる前、7年間ほどクラスリーダーのボランティアとして活動していた。

「留学経験もあり、国際交流や日本の文化を発信することへの興味があったので、仕事が休みの時にボランティアを始めました。教えることで成長でき、仕事とは違い、ネガティブな気持ちがなかったので続けら



上級クラスの学習者さんとボランティアさん。





社会科学見学。写真提供=日本語グループ WAIWAI

れています。土曜日の朝を嫌と思ったこと
 がありありません。代表になり、作業量
 が増えたり、大変なこともあるけれど、割
 り切ってやっています」とご自身について
 語ってくれた。

「現在、50名ほどボランティアの会員が
 います。主婦の方やリタイヤ後の方々など
 が多く活躍しています。若いボランティア
 は自分が活動を始めた当初より少ないです
 が、参加してくれたら嬉しいですね。毎月、
 月初めに委員会を行い情報共有をしていま
 す。忘年会や料理大会などのイベントを企
 画し、ボランティア同士や学習者との交流
 の場も設けています」と日野岳さん。継続
 するにはボランティアと学習者、共に飽き
 させない工夫も必要ようだ。

ボランティアさんの声

上級クラスのボランティアの方々からお
 話をお聞きました。

「定年後、知人に誘われてから20年、ボ
 ランティアとして関わっています。人生経
 験から、教科書では載っていないことを教
 えられます。ただ、教えるより教わること
 の方が多いです。マスコミを通さず、各国
 の方の本音が聞けるところが魅力です」「ボ
 ランティアをやって、仲間ができました。
 週に1回、レッスン後、教室と離れてみな
 さんとランチしながらの交流が楽しいで
 す」「日本の伝統や文化を伝えたく、ボラ
 ンティアを始めました。活動を通して、世
 の中のためになりたいです」などなど、み

なさんの前向きな発言に、元気をいただい
 た。ボランティアをすることで、日々の活
 力がふつつつと湧いているようである。

活動を通して自己成長

誰かに何かを教えることで、自分が成長
 した経験を味わったことがある方は多いと
 思う。代表の日野岳さんからもボランティ
 アの方からも、活動を通してご自身の成長
 を感じたお話を聞くことができた。誰かに
 求められることで今以上に自分の力を発揮
 できる。そして、やりがいとなり、生きが
 いとなっている。そんな姿に触れられた1
 日だった。

日本語グループ WAIWAI

090-9203-4863
 連絡先 <https://waiwaigak.wixsite.com/waiwaijp>



次ページでは
 活動内容を紹介しています



深める

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。



市民がつくる スポーツ・コミュニティ

6 身体をつくり、ともに生きる力をつくり、「地域力」を育てる！

～キンボールスポーツがもたらすもの

◇小山博・大熊裕子（一般社団法人 荒川区キンボールスポーツ連盟）

10 「だれもがともに」が合言葉！スポーツを通して共生社会へ第一歩！

◇宮嶋利明（共生共走5時間リレーマラソン実行委員）

13 **寄稿** 心と日常生活を豊かにするスポーツの「文化的価値」

◇高岸祐幸（一般社団法人 あきる野総合スポーツクラブ ASport 理事長）

17 **あすマネ** 世代交代、みんなどうしてる？

～団体のこれからを考える～

知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形やボランティアに
一歩ふみだすヒントを、ご紹介します。

1 思い立ったがボラ日 日本語グループ WAIWAI / 外国人の人たちの日本語学習支援

21 TVAC News Vol.5 企業ボランティアの祭典 2020

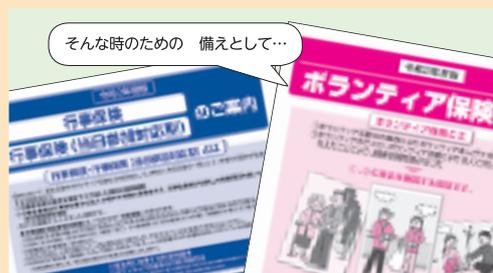
22 つぶやきブレイク vol.12 ちぐはぐで、ゆるくて、一瞬

23 セルフヘルプという力 第23回 病名ではなく、生活の困りごととしてとらえる視点を
難病の制度と支援の谷間を考える会

26 いいもの みい～つけた！ vol.24 社会福祉法人つむぎ おだまき工房
[裂き織り] を主とした1点物!!

もしもボランティア活動中に怪我をしたら… 怪我をさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル 3階

TEL. 03-3268-0910

FAX. 03-3268-8832

URL. <http://www.tokyo-fk.com/>

市民がつくる スポーツ・コミュニティ



写真提供＝一般社団法人 荒川区キンボールスポーツ連盟

得意か苦手か。観るのが好きか、自分が動くのが好きか。スポーツに関して、両極のとらえ方をしている人は案外多いかもしれない。しかし地域には、経験がない、運動神経が良くない、年齢が高い、障がいがある…そんな人でも安心して楽しめる場がある。誰もが、気軽に、それぞれのスタイルに合わせて身近な地域でスポーツを楽しむことができれば、それは健康を育むだけでなく、交流や子育ての場となり、ひいては防災・減災のまちづくりや、地域社会の再生などにつながる、豊かな可能性を秘めたコミュニティになり得るのではないだろうか。

今号では、地域の市民によるスポーツ・コミュニティの取り組みの取材や寄稿を通してその可能性を考えたい。

インタビュー

身体をつくり、ともに生きる力をつくり、「地域力」を育てる！ キンボールスポーツがもたらすもの

小山博・大熊裕子（一般社団法人 荒川区キンボールスポーツ連盟）



（上）キンボールは、男女混合、ミドルエイジ、ビギナーなどさまざまな部門をもうけることができる。
（下）キンボール教室の様子。 写真提供＝一般社団法人 荒川区キンボールスポーツ連盟

「すべての人が楽しめるスポーツ」

「キンボールって何だろう？ 楽しそう」国内で大会が開催できるくらいのチーム数があるってことだね」
―特集テーマの取材先を探すなかで偶然、キンボール（正式な競技名称はキンボールスポーツ）を知った。

動画を観てみると、なんと3チームでやる競技だった。ピンク・ブラック・グレーの中でいわゆるサーブ権を持つチームが「オムニキン、グレー」と声かけて大きなボール（直径122cm、重さ約1kg）をヒットすると、指定されたグレーチームがボールをレシーブする。床に落とせばピンクとブラックに得点が入る。オムニは「すべての」という意味で、キンは「kinesthea」（キネスシス、運動感覚）の略語で、「すべての人が楽しめるスポーツ」という造語なのだそうだ。



(右)第8回あらかわ杯でのゲーム風景。

(左)すべてのプレイヤーがボールに触る機会が多いのがキンボールの特長だ。

全国から参加申し込みがある大きな大会を主催している「一般社団法人荒川区キンボールスポーツ連盟」の練習もしくは試合の様子を見しながらお話を伺おう、と取材を申し込んだ。同連盟には、荒川区のキンボールスポーツチーム14団体・約200名が所属している。荒川区内におけるキンボールスポーツの普及・技術の向上、審判研修の実施、地域のスポーツイベントへの協力を行うほか、毎年2月に全国から1000を超えるチームが集結する「あらかわ杯」を主催している。

荒川区でのキンボールスポーツ連盟のはじまりと広がり

今回、お話を伺ったのは、同連盟会長の小山博さんと理事長の小熊裕子さん。まずは、小山さんにキンボールスポーツについて説明していただいた。それは、1986年にカナダ人が考案した球技で、2001年から国際大会が催されるようになった。日本に紹介されたのは1997年。関西国際大学などの関西のチームを中心に徐々に広まり、2000年に日本で初めて大会が開催された。「キンボールは、ルールや面白さを口で説明するのが難しいのですよ。練習

や試合の様子を見て、できれば体験もしていただけたらよかったです」と小山さんは残念そうに言う。

おりしも、取材決定直後に新型コロナウイルス感染拡大防止のため、相次いで大会中止や活動休止となり、インタビュ会場に指定していただいた区民館も休館になり、急遽、ファミリーストランでお話を伺うという状況だった。とはいえ、大会パンフレットの写真からは、さまざまな年代のプレイヤーの生き生きとした表情が見とれ、魅力的なスポーツであることは伝わってくる。

キンボールを始めるきっかけは何だったのだろうか。

2004年頃、お二人を含む荒川区の体育指導員たちが、新しいスポーツを区民に紹介しようと考えていたそうだ。体育指導委員は現在、スポーツ基本法の施行によりスポーツ推進委員と名称変更しており、区民の健康増進や体力向上、また地域スポーツの促進を図るため、区から委嘱された非常勤公務員であり、地域でのスポーツ指導者や行政とのパイプ役としてさまざまなスポーツイベント等で活躍している。荒川区には45名のスポーツ推進委員がいるそうだ。

委員たちは、常に区民の生涯ス

ポーツ奨励を考え、それまでもビーチボールやミニテニスを取り入れ、それぞれ区民に定着し、さて次は、ということキンボールを取り入れることにした。そのなかでも、キンボールの広まりが大きかったのはなぜか、その理由をうかがった。

「ビーチボールはママさんバレーの延長のような感じで、ミニテニスはお年寄りの運動不足解消のためと、対象が自ずと縛られてしまいました。一方、キンボールは対象を選ばないという特長があります。最初は子どもたちの体力向上を目的として導入したのですが、見ている親御さんも始めたりして、プレイする人が増えていきました。大会は、ジュニア低学年・高学年、ビギナー、チャピオン(国際公式ルールで、主に体育大生やその卒業生などのチーム)、シニア、男女混合などさまざまな部門があるので、初心者から選手をめざす人まで参加でき、体力に合った楽しみ方ができます。加えて、キンボールには競技型のほかにリードアップゲームという協調型ゲームもあり、すべての人ができるスポーツなのです」

荒川区の場合は行政や教育委員会の協力もあり、夜間に無料で使える学校施設もある。キンボールを



(右)1人がヒッターとなり、3人がボールを支える。
(左)第65回区民大会の集合写真。さまざまな人が関わっていることがわかる。



するには、大きなボールや3チームの得点を表示できるスコアボード、ゼッケンなどの費用がかかってしまうが、同連盟では道具の貸与もしている。コートのがさが取れる屋内の場所(15×21m×15×21m)と人数がそろえば、メンバーが出向いて教えることもあるそうだ。区内で14ものチームができたのは、そうした連盟の配慮も大きかっただろう。

子どもたちの心身が育つ

2006年に荒川区交流大会を開催、翌年には荒川区キンボール連盟が設立され、設立記念大会を開催、以降毎年、大会を行っている。最初の頃は、チームを勧誘して大会に参加してもらっていたが、今では多くのエンストリーがくるようになった。日本でスタートしてからの年数を考えると、キンボールの普及はとてども早く感じる。単なる競技にとどまらない魅力があるからだろうか。

大熊さんは言う。「キンボールはプレーヤー全員が絶対に参加するスポーツなのです。ヒットする際、ヒッター以外の3人がボールを支えるというルールがあります。ボールに触れるチャンスが多いので、参加したという気持ちを得られるのですね。」

また、1人が連続してヒットすることはできないので、プレーヤーが単独活躍するということもありません。ボールを床に落としたり、反則を犯せば、他の2チームの得点になるので、強くないチームでも点が稼げます。暴言や暴力など、アスリートらしからぬ行為をした場合も相手チームの得点になります。子どもにとって体力向上につながるのはもちろんですが、キンボールを通してチームワークやマナーを学び、考える力がつきます。子どものゲームに対して

見ている大人が指示しても動きづらなもの。プレーヤーである子どもたち自身が作戦を考えて動かなくてはならない。やんちゃだった子が、考えて行動するようになったり、年下の子どもを面倒を見るようになったりするなど、キンボールが日常で生かされているのを実感しています」

荒川発キンボール流 「豊かな地域」のつくり方

理事会には事務局のほか、区内の各クラブチームからもメンバーが参加し、25名ほどがコアメンバーとして活動している。それにより、それぞれのチームの意見が連盟に直接反映されるしくみになっている。その

理事会では、ネットワーキングをする人、普及に力を入れる人、対戦表を作成する人、広告を取ってくる人など、それぞれが得意なことを發揮し、動いているそうだ。これが十数年続いた秘訣の一つだろう。

大会の際には、国際武道大学キンボールスポーツ部やその卒業生がつくるAURORAというグループをはじめ、多くの人が運営や集計等に協力してくれる。「とはいえ、団体運営も毎年の全国大会も大変でしょう」と尋ねると、「これまでの蓄積をもとに続けているから、それほど苦労は感じない」と二人は微笑む。チームワークが大切なキンボールスポーツ効果が団体運営にも影響しているのだろうか。

そろそろ考えなくてはならないことは、世代交代。次世代にスムーズにつなげていきたいと考えているが、期待する次世代はまだプレーヤーのため、運営まで手が回らない状態だという。まだメジャースポーツにはなっていないキンボールの普及をすすめていくためにも、継いでくれる人たちが必要であろう。

最後に、目標を伺うと、「ワールドカップに出場するプレーヤーを荒川から出したい」という答えがかえってきた。スポーツを通じたコミュニ



連盟のFacebookページ。
催しの告知などを掲載しているほか、
報告の動画なども見ることができる。

ティづくりとは対極の目標ではないかと一瞬、意外に感じた。が、それは、キンボールのすそ野を広げることが前提にあって、その結果としてのワールドカッププレーヤーの輩出なのだという。

「一般社団法人 日本キンボールスポーツ連盟」のホームページには以下のような記述がある。「運動神経を磨いたり、競ったりする一面的な記録主体の競技でなく、運動による感性創出すなわち『励まし、助け合い、感動の共有や協調性を高める』そんなコンセプトを具現化したスポーツがこのキンボールスポーツと言えます。社会や経済の成熟・衰退化は、人と人の関係を弱めたり、生きがい感の喪失、強い精神ストレスの発生など多くの問題を生じせしめています。キンボールスポーツのデビューは、このような背景の中から『共に生きる力をつける』ことをテーマに、カナダ・ケベック州マリオ・ドゥマース氏によって創案されました。」

キンボールスポーツは人を育て、つなげ、豊かな地域をつくる——それは大げさな表現ではないのかもしれない。

荒川区キンボールスポーツ連盟には現在、会員が200名近くいる

そうだ。会員は、必ずしもプレーヤーではない。活動を応援したいから、子どもが世話になっていくから、といった理由の人もいる。荒川区長も名誉会長として応援してくれているという。「私たちの連盟は、見る・観る・支える人たちが成り立っているんです」と小山さんは語る。

荒川区でのキンボールの普及が地域づくりの一助となる……そんな視点から考えても、キンボールはとても魅力的なスポーツである。

一般社団法人
荒川区キンボールスポーツ連盟
<https://www.facebook.com/kinball.arakawa>

「だれもがともに」が合言葉！
スポーツを通して共生社会へ第二步！

宮嶋利明（共生共走5時間リレーマラソン実行委員）



写真提供＝共生共走5時間リレーマラソン実行委員会

何らかの社会的なハンディがある方にとって、社会参加して行く場はまだまだ多くありません。また、周りの理解を得ることも容易なことではありません。ともに生きる社会の実現のため、市民の力で取り組む「共生共走5時間リレーマラソン」実行委員の方にお話をうかがいました。

リレーでつなげる
地域のイベント

——「共生共走リレーマラソン」とはどのような活動ですか？ また、始められるきっかけはありましたか？

始まりは、大阪の共生・共走リレーマラソンを東京でも広めたいという2人の実行委員メンバー（故人）の思いつきからです。

今年で24回目となる「共生共走リレーマラソン」は、私たち「だれもがともに連絡会」が中心となり、毎年

秋に東京南部地域で行っているイベントです。この「共生共走5時間リレーマラソン」は、子どもから大人まで、障害の有無や国籍、年齢や性別を問わず、だれもがともに生きる社会を目指し、開催されてきました。参加希望者は誰でも参加できます。ルールは一つだけ。5時間の間チームのどれか1人がコース上にいることです。

振り返るといろいろあるのですが、例年は、品川・大田・目黒・港等の障がい者団体や認証保育園・シニア会・小中学生等30チームほどが参加しています。イベントは、リレーマラソン（車いす・ジョギング・歩き・仮装等スタイル自由）だけではなく、特設ステージでの歌・太鼓・民族舞踊等のステージパフォーマンスと、広会場内の復興支援物販・模擬店・フリーマーケットの出店、また、各種団体のPRパネルや災害ボランティアの活動紹介の展示、さらに車いす・パン食い競争・スタンプラリーの遊



特設ステージの様子。マラソンに参加しない人も、楽しんだり交流できる場がつけられている。

びのコーナーを設けています。
 — これまでどのような方が参加されましたか？

マラソンでは、車いすの人や仮装をした人、一輪車を乗りながら完走するチームなど様々な参加者がみられました。区立の小中一貫校である八潮学園の学生が5〜6名で歌いながら、又はじゃんけんをしながら走っていたチームもありました。

昨年のステージでは、中国伝統楽器演奏やダンスを披露してくれた、高齢化する中国帰国者1世の支援をする夕陽紅の会、手話ダンスの輪の会、アイヌ伝統楽器と舞踊のレラの会、照屋三線倶楽部の琉球民謡等とそれぞれの個性が光る出演でした。レラの会は、アイヌ民族のムツクリという、口にくわえて、はじいたり振動や共鳴させて音を出す、竹と糸でできた伝統的口琴楽器の演奏を披露してくれました。

開催当初は、近くにあったベトナム難民の受け入れ施設から、その方たちが民族衣装のアオザイを着て参加してくれたりしました。そのような方たちが、楽しんでもらえる場を提供できたことは良かったと思っています。他の年には、モンゴルの

移動式住居ゲルを立て、中に入り体験してもらったこともありました。イベントは交流の場としても大切な役割を担っています。

「民の力でやってきた誇り」

— 活動の特徴や続ける中での課題はありますか？

現在は、10名ほどの実行委員がカンパをしたり、開催資金を集めたり、持ち寄りで活動しています。25年も続けていると、メンバーが高齢化してきたことから、世代交代を考えていますが、もっと若い人の参加があると嬉しいのですが……。

ただ、主体が「民の力」で、細々ではありますが、続けられているのはありがたい、すごい!!と感じています。企業などのサポートも多くなり、大きなイベントではありませんが、ずっと「民の力」主体でやってきたことは私たちの誇りです。

— イベントを通して広がりなどありますか？

マラソンイベントの他、毎年2月には餅つき大会(25年以上続いています)、マラソン開催の2〜3カ月



対象を特定してないため、毎年さまざまな人が参加している。

◆活動への想い◆

東日本大震災では、備えがあれば助かったはずの障害者が多数犠牲となりました。その教訓を学ぶ講演会や映画の上映会を開催してきましたが、熊本地震などでも障害者はなお多くの困難に直面しています。また2016年には、障害者施設やまゆり園で、命に優劣をつける思想をもって19名もの尊い命が奪われる事件が occurred。そのような悲惨な事件が二度とおこされないためにも、これまでの企画を引継ぎ、支援のあり方を考え、だれもが地域とともに生きる取り組みをなお一層続けていきたいと思ひます。ともに生きる社会をこのイベントでより多くの方と考へていきたい、共生社会へ向けての第一歩となりたひと思ひます。

共生共走5時間リレーマラソン実行委員会 代表 鈴木敬治

共生共走5時間リレーマラソン実行委員会

<http://www.daretomo.tokyo/>

前には「プレイベント」も行っています。昨年の共生共走リレーマラソン「プレイベント」では「近所deだれもがともに防災活動 いのちと防災を考へるゆめ風中学生プロジェクト」と題して、大阪で地域の障害者と現地の中学生が交流しながら、防災訓練を実施した様子を記録したDVDの上映会を開き、上映後、パネルデ

スカッションを行いました。地域の方にもっと参加してもらい、障がいのある方や様々な民族の方を知ってもらいたいと思ひます。また、対象が限定されない活動なので、リアフリー化をさらに進めていきたいと思ひます。ホームページも開設していますので、ぜひ、そちらも見てください。

心と日常生活を豊かにするスポーツの「文化的価値」

高岸祐幸（一般社団法人あきる野総合スポーツクラブ ASSport（アスポルト）理事長）

「壁」を取り払うことができるはずのスポーツの壁

スポーツや音楽などの文化活動は本来、社会の中にあるさまざまな「壁」を簡単に打ち破ることができ、便利なツールであるはずですが、

『壁』とは、例えば「年齢の壁」「言葉の壁」「人種の壁」などのことです。このような避けようのない壁を少しでも取り払うきっかけになるものが文化活動であり、スポーツもそのひとつです。例えば野球ボールがそこに1個あれば、年齢差があっても、言葉が通じなくても、キャッチボールができます。キャッチボールを繰り返すことで、お互いに気遣ったり、微笑みあったり、失敗を笑ったり、お互いに心の交流を楽しむことができます。

しかし、国内のスポーツ環境を眺めてみると、「年齢の壁」「種目の壁」などをより高く設定してそれぞれが

独自社会を築き、他を寄せ付けない空気を生み出しているように感じられました。スポーツは勝利を目指さなければならず、そのために他のことを犠牲にすることが当然という圧力がかけられます。そして交友関係もスポーツ集団を最優先にすることが強いられ、鉄の結束を作ろうとします。もし退団しようとするれば「裏切り者」「脱落者」といった扱いを一時的に受けることすら少なからずありました。そのため、何かスポーツを始める際にはある種の勇気や覚悟が伴ったわけです。その覚悟ができない人はスポーツを嗜むことができません。そういう壁を好まない人もスポーツを遠ざけて生活していくこととなります。

『スポーツをもっと身近に』をスローガンに

一般社団法人あきる野総合スポー

ツクラブ（通称：ASport）は、あきる野市の東部（秋川地区）を拠点として2010年に創設されました。創設当初、私はこの地域に移住して15年ほどの時期でした。移住者だからこその地域のおおらかさを強く実感していたのかもしれませんが、そのような地域に「おおらかに、朗らかにスポーツをやってもいい。むしろそれが本来のスポーツです。」というメッセージを発信することが当クラブの設立意義でした。『スポーツをもっと身近に』というスローガンは、そのような意味を込めて掲げました。

クラブ創設の翌年8月にはスポーツ基本法が施行され、法律的にスポーツの解釈がようやく世界基準に設定されたと私は思いました。この法律を地域の方々に伝える作業も含めて、スポーツを身近に感じていただくよう決意しました。

当クラブ創設の動機はもうひとつ

ありました。まずはひとつめの理由と重なる点もありますが、当時、あきる野市内で中学生サッカーチームの指導をしていました。昨今のサッカー業界は、サッカーを始める年齢が低年齢化していました。幼稚園や保育園でサッカー教室が普及しており、入団してきた中学生のほとんどがその年齢からの競技歴をもっていました。それと同時に、他種目の経験が著しく不足しているため、身体操作能力がサッカーに特化した要素しか発達していませんでした。結果的に、転倒するとすぐに骨折などの重症を負う確率が高く、負傷予防のためにマット運動を導入してみると、前転（でんぐりがえし）すら普通に行えない中学生が多いことに気がかされました。

また、心理的にも影響していました。サッカー以外のスポーツを避けようとするのです。「やったことがないからできない」「できないこと



ASportのFacebookには、参加している人びとの生き生きした写真がたくさんアップされている。



はしたくない」というとても閉鎖的な行動心理が確立されていました。そのままだと将来、町内会で親睦ソフトボール大会があったら「やったことがないから参加しない」となるわけで、地域コミュニティを避ける人物の育成になってしまいます。これではいくらチームが強くなっても町クラブ（地域スポーツ）に携わる者としては満足できません。私なりにリサーチしたところ、他種目でも似たような傾向が複数聞かれたので、総合型スポーツクラブの創設により、このような状況を改善させていきたいと考えました。

「地域の人」を主体にして展開

当クラブの最初のプログラムは3つ（『体操教室』『走り方教室』『フットサルパーク』）でした。

『体操教室』は小学4年生以下を対象に開設しました。『走り方教室』は小学4年生以上から中学生までを対象に開設しました。どちらも金曜日の夕方に設定しました。平日の夕方であれば、週末にさまざまな種目団体に入団している子どもたちが一緒に運動する機会を演出できると思えました。そこに種目団体には入っていない子どもたちも加われば、ス

ポーツ環境を通じたコミュニケーションが活発化させられるかもしれない。『走り方教室』では小中学生が一緒に運動できる貴重な機会になるとも考えました。小学6年生と中学1年生はひと学年しか違わないのに、生活は完全に分断されている状況を少しでも緩和させたかったからです。

『フットサルパーク』は木曜日の夜に、大人向けプログラムとして開設しました。少年サッカーの試合会場で、保護者たちが大きな声で応援している中、子どもの失敗を叱責する声もよく聞かれる現状に対して「自分でやってみてください。ミスしないことは不可能なことを体感できますよ」という思いです。ミスも含めてスポーツ。ミスよりも成功を讃える雰囲気です。スポーツをすることがどれほど楽しいかを伝えたいと思えました。ちなみに、平日の夜とはいえ、大人だけで運動しにくいことがなかなかできないのが子育て世代の現実です。お子さんを連れて参加してもよいルールにすることで、参加しやすくしています。

その後は会員の方々からの要望に応じる手法でプログラムを増設していきました。大人（子育て世代）のためのサッカープログラム、未就園



未就学児や障がいのある人などもスポーツを楽しんでいる。



児や未就学児のための運動プログラム、気軽なバレーボールやラゲビープログラム、市内相撲大会のための小学生相撲プログラム、初心者向けヒップホップダンスプログラム、障がいのある方のための運動プログラムなどなど、年間通したプログラムを中心に、期間限定プログラムも含めて20以上(11種目)を開催しています。

創設当初は、私たちが意図したプログラム開設のみでしたが、ここからは会員を中心に地域の方々が発案したものであり、そこが重要だと思っています。会員数は毎年500名を超えています。そして要望も毎年複数寄せられています。会場やインストラクターを整えられて実現できたプログラムと、それができずにクラブの宿題として残しているものがあります。

創設から10年経ちますが、その間に閉鎖したプログラムもいくつかあります。いずれも人気インストラクターが続けられなくなったことが原因です。インストラクターは近隣在住の方々に絞っています。遠くの方だと長く続けられない可能性があるからです。可能な限り、この条件にはこだわっていきたいと考えています。

教わるスポーツから、楽しむスポーツへ

『フットサルパーク』『スポーツパーク』などプログラム名に『パーク』とつけているものが複数あります。現在企画中のプログラムにも『パーク』をつける予定です。

教わるスポーツから、楽しむスポーツへ。公園で遊んでも、上手な子が教えてくれることもあり、すし、大人(親や近所の人)が教えてくれることもあります。近所の公園は遊ぶ(運動する)人たちにとつてのコミュニティなわけです。当クラブの活動もそういうことをイメージしている、というメッセージを込めているつもりです。

成長するのは子どもだけではありません。大人も成長する喜びを感じることもできるのがスポーツや音楽の良さ(わかりやすさ)だと思っています。自分で運動することが苦手な大人は、見て楽しむ、支えて楽しむこともできます。スポーツ先進国では、スポーツ施設と飲食施設が併設されています。これはスポーツがコミュニケーションツールであることを認知しているからこそです。日本でも既存施設がこのような改善(改築)を



写真提供＝一般社団法人
あきる野総合スポーツクラブ ASport



進める施策が実行されることを願っています。これが実現すれば地域の方々のつながりも深まると思っています。これが実現することを黙って待っていても改善はないので、日常的に複数種目を嗜める環境作りをすることや、他種目の活動情報を積極的に周知することで観戦・応援しやすくすること、そしてクラブ内にこだわらず地域の他団体とも積極的に情報共有を呼びかけることをしていこうと思います。自分とは違う趣向の人たちとの交流によって、人としての新しい出会いだけではなく、新たな趣味が見つかって心がより豊かになるキッカケになるかもしれません。

最近では、教育ジャーナリストを招いた子育てセミナーを開催しました。日頃の保護者との会話の中で子育てに悩んでいることを知り、少しでも役に立てればと企画しました。

スポーツドクターの辻秀一先生が唱える、「スポーツの文化的価値」元気・感動・仲間・成長」を地域に浸透させることが、結果的に日常生活を豊かにするものと信じて活動しています。

また、総合型地域スポーツクラブの今後の重要課題として、中学校の部活動問題があります。部活動ガイドラインにて、部活動を学校内だけ

の活動に限定しない工夫をすることが投げかけられました。あきる野市でもこの課題を積極的に取り組みたいところですが、現時点ではあくまで中学校という枠組みの中の課題とされています。私から行政に検討委員会設置を提案したものの、実現に向けた動きには至りませんでした。おそらく、中学校側から提案があれば動き出すのではないかと予想しています。部活動の取り組みを地域で支えることができたら、生徒の成長はもちろん、年代の切れ目ない、より豊かな地域社会づくりにつながるのでは、と思っています。

一般社団法人
あきる野総合スポーツクラブ
ASport
<https://www.asport.jp.net/>

あすマネ

明日からすぐにマネ(真似・マネジメント)できる!

このコーナーは、TVACに寄せられた相談をもとに、市民活動やNPOの運営にまつわるヒントを紹介しています。

* 本日のご相談 *

世代交代、みんなどうしてる? ～団体のこれからを考える～

ボランティア団体を立ち上げ、20年以上活動をしてきました。

中心になっているメンバーが高齢になってきたので、そろそろ世代交代をしたいのですが、良い担い手がなかなか見つからず、困っています。

他のNPOではどうしているのでしょうか?

「世代交代」は、多くのNPOやボランティア団体が直面している課題の一つです。メンバーの高齢化が進んでいる中、この先、団体をどのように運営していけばいいのか、という相談が、当センターに寄せられることもあります。今日は、NPOの世代交代というテーマについて考えてみましょう。

● 世代交代の準備が進まない現状

全国のNPO法人を対象に実施した内閣府の調査によれば、代表者が65歳以上の法人が約6割となっており(図1)、NPO法が施行されてから20年が経ち、高齢化が進んでいることがわかります。さらに、代表者が高齢であるほど、世代交代に対する意識も高いという結果も出ています。

一方で、代表の交代を検討しているNPO法人のうち、約6割が「準備はあまり進んでいない」と回答しており、メンバーの高齢化が進み、世代交代を考えながらも、実際には思うように進んでいない現状がうかがえます。その理由として、「適切



な候補者が見つからない」が半数を超えています(図2)。確かに、当センターで受けているNPO相談でも、「代表の代わりになる人がいない」、「創設者と同じようには運営できない」という声をよく聞きます。けれども、本当に「適切な人がいない」のでしょうか?

● 世代交代を機に団体のこれからを考える

ここで、先ほどの調査をもう一度

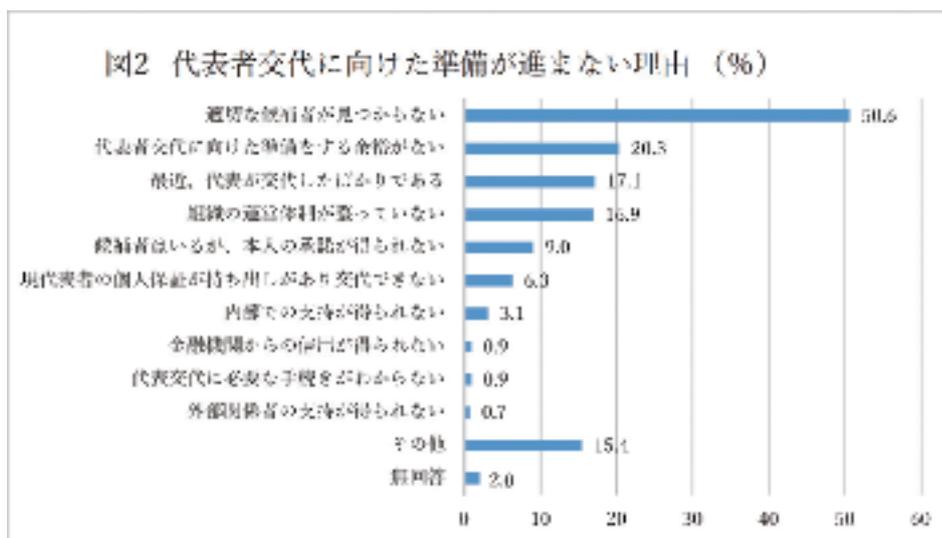
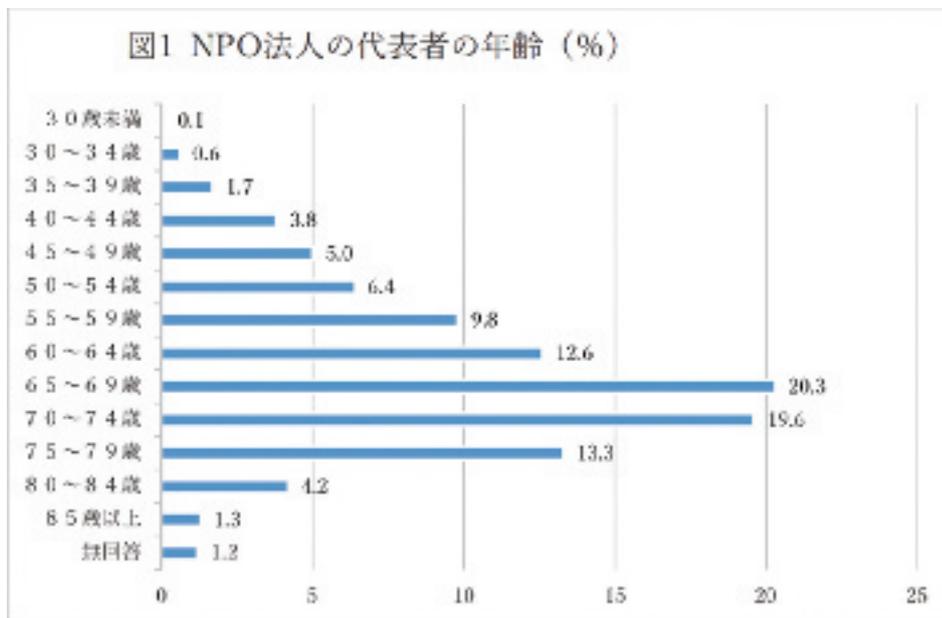
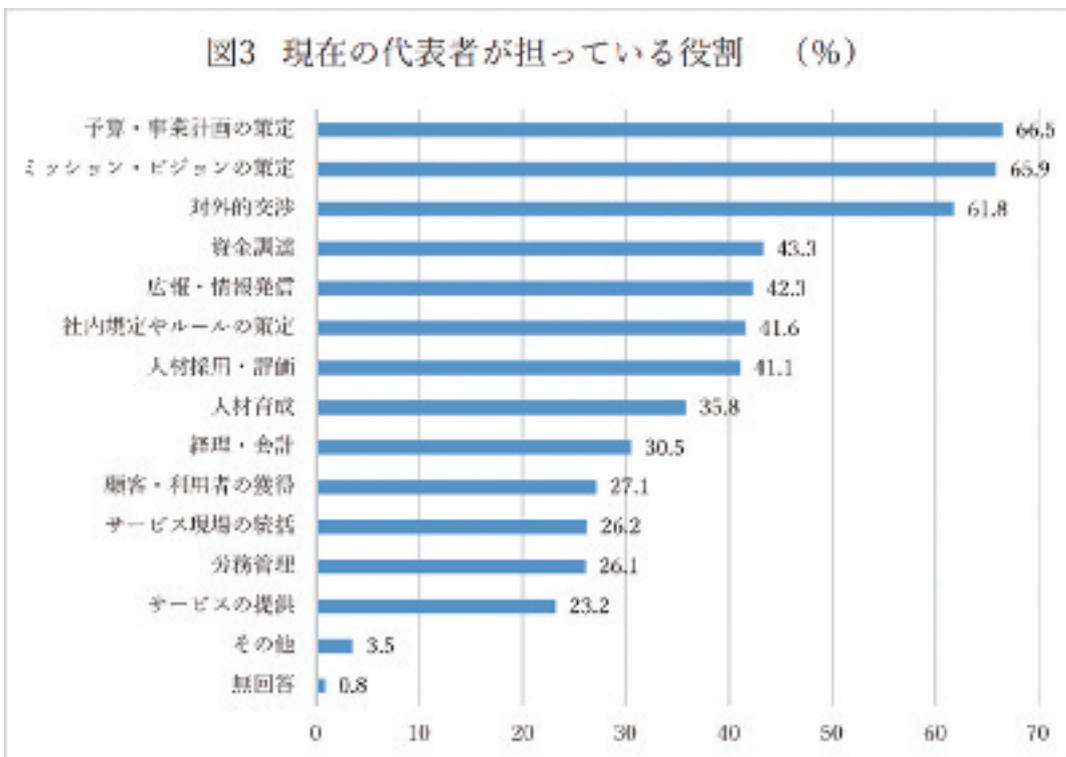


図1～3はいずれも、内閣府「特定非営利活動法人における世代交代とサービスの継続性への影響に関する調査」(2019年3月)をもとに作成

見てみましょう。代表が現在担っている主な役割についての項目では、「予算・事業計画の策定」(66.5%)、「ミッション・ビジョンの策定」(65.9%)、「対外的交渉」(61.8%)が上位に挙がっているほか、「資金調達」や「広報」、「人材育成」など非常に多岐にわたっています(図3)。多くの団体では、組織運営の重要な部分を代表が担っていることがわかります。確かに、代表には、団体の基本理念を十分理解し、それらを実現するための実行力が求められています。

しかし、その反面で、組織運営に必要な役割や権限が代表一人に集中している、というケースも少なくありません。代表やその家族など、特定の人たちの意に添うように議論が進められていないか、会としての重要な決定をするときにメンバー一人ひとりが自分の意見を話せる文化があるか、それぞれの役割分担を明確に決めているか、会計報告を第三者的な立場の人がチェックする仕組みになっているか…これらは、団体がNPOとして、民主的な組織運営をしているかどうかの裏返しでもあります。見方を変えれば、世代交代を考えるとすることは、組織のあり方

図3 現在の代表者が担っている役割 (%)



を見なおし、団体のこれからを考える機会でもあるといえます。

●今いるメンバーで何ができるか

NPOの中には、カリスマ的な発信力のある代表が活動を先導してきた団体も少なくないと思います。これは、社会課題に対して先駆的に取り組みという市民活動の性質から考えると、メリットに働く部分はあるでしょう。けれども同時に、そのことによって、組織が、代表個人の求心力に依存しがちになるという一面もあります。

相談を受けている中でも、「カリスマ的な代表のあとを引き継げる人がいない」という声を聞くことがよくあります。こうした問いかけに対して、「そもそも、今の代表と同じように運営を続ける必要があるのか」と考えてみることもできます。バトンを受け継ぐ側が、代表の「カリスマ性」をさらに助長してしまうことで、世代交代のタイミングを逃してしまうことがあります。時代によって、取り組むべき社会課題が変化するように、組織のあり方も、中

心になるメンバーによって変わっていくのは自然なことです。今いるメンバーで何ができるのか、どのようなやり方が自分たちに向いているのかを探ることは、団体の運営を考える上で大事なポイントです。

ここで注意したいのは、活動の継続自体がミッションではないということです。団体を続けることを目的化するのはなく、この活動にニーズがあるのかどうか、あるいは、メンバーの気持ちをあらためて問うことも、ときには必要でしょう。場合によっては（少し勇気がいるかもしれませんが）、「会を解散する」という選択肢もあるかもしれません。自分たちが大切にしてきた理念を、同じ分野で活動する他のNPOが継承することで次世代につなげていける可能性もあります。長い目で見れば、本当に社会から必要とされ続ける事業は、短期間で完成されるものではないと思うのです。

●みんながリーダーシップを發揮できる文化

活動の歴史が長いNPOの場合、

こちらもおススメ！



『ネットワーク』誌・バックナンバー

353号 特集 世代交代というボタン

- ・元気なうちに、「子ども世代」に引き継ぐ
富永一夫 (エヌピーオー・フュージョン長池)
- ・世代交代をすること、しないこと—団体として最適な方法を
開澤真一郎 (NICE)
- ・新しい組織によって、新たな世代が参画する
田中佳子 (多摩川地区協議会)
- ・活動の継続とバトンタッチのヒントを探る
—セルフヘルプグループ・当事者活動団体の場合
小林幸子 (かながわボランティアセンター)

QRコードからご購入いただけます！



東京ボランティア・ 市民活動センターの相談

東京ボランティア・市民活動センターでは、NPO、ボランティアグループ、当事者団体の設立・運営などのご相談をお受けしています。ぜひ、お電話ください。

TEL:03-3235-1171

かつてのメンバーが入れ替わっていき、ということがあります。創設期のメンバーがつくりあげたものを土台にしつつも、今、参加している人たちも、その時々に必要なものは何かを話し合いながら、新たな組織をつくりあげていくことも大切にしていく視点です。かなり昔に決められたルールにやみくもにしばられるのではなく、その時々状況に応じて、変化していく柔軟さが求められま

す。その一方で、変わらずに受け継いでいくべきものは何なのか、団体として大切にすべきことを話し合う場を設けてみるのも良いでしょう。その際、メンバー同士が互いに納得し、共有できる理念を探すプロセスをおして、団体が進むべき方向性が少しずつ見えてくるはずで

り、また醍醐味の一つでもあります。世代交代を考えることは、組織のあり方を見なおすことにもつながります。それぞれの役割分担を明確にしたり、今の団体にとって何が必要なのかをメンバーで話し合ったりと、そうした作業をおして、みんながリーダーシップを発揮できる文化を育むことは、世代交代を考える上で一つのヒントになると思います。

今回、相談をいただいた団体では、それぞれのメンバーがこれから何を大切にしていきたいのか、時間をとって話し合う場を設けるそうです。活動を続けていくのか、区切りをつけるのか、組織の見なおしにつながるのか、どのような結論が出るにせよ、それぞれのメンバーにとって納得のいく話し合いとなることを願っています。

(金井聡 相談担当専門員)

Vol.5 企業ボランティアの祭典2020

第5回『企業ボランティア・アワード』



東京ボランティア・市民活動センターでは、企業の社会貢献活動や社員のボランティア活動を応援するために、情報提供や講座・イベント・協働プロジェクトなどを行っています。2月13日には、5回目となる「企業ボランティアの祭典2020」を東京大神宮マツヤサロンで開催しました。このイベントには、企業のCSR・社会貢献担当者、企業で働きながらボランティア活動をする人、NPOや福祉施設

のスタッフが一堂に会し、企業ボランティアの功績を讃え、情報交換やネットワーキングをすることを目的としています。祭典の第1部は「企業ボランティア・アワード」の表彰式から始まり、大賞受賞企業とパートナー団体のインタビュウが行われました。第2部は、中村陽一氏(立教大学 社会デザイン研究所所長)の「おしゃべりラボ」しあわせ Social Design

2019年度に実施した「企業ボランティア・プロジェクト」の実践報告がありました。企業ボランティア・アワードは、応募いただいた中から選考委員会により選ばれた企業、またはその従業員のボランティア・グループに賞を贈呈しています。今年度は応募が増え、企業の社会貢献への関心が高まっていることを実感しています。

●大賞

①株式会社LIXIL インテリア事業部×社会福祉法人 花水木の会 他
社員ボランティアにより社内・工場内で、福祉施設でつくるお菓子を販売

②MSD株式会社×NPO法人 ファミリーハウス
社員から集まった本の売上金を病気の子どもと家族に寄付する『Book for Smile』等を企画

③セガサミーホールディングス株式会社 セガサミーグループ×復興支援団体 プラスネオ
本業を活かし、東日本大震災の復興支援を継続

●特別賞

④日本電気株式会社(NECグループ)×NPO法人ダンスラボラトリー 他
さまざまな社員のボランティア活動を通じダイバーシティ&インクルージョンの普及活動

●バリューアップ奨励賞

⑤株式会社I&S BBDO
×かながわブライndsスキークラブおよび社会福祉法人 南風会 シャロームみなみ風
障害関係団体のPR動画制作とカフェレストランの夜間営業の企画

●インクルーシブ社会奨励賞

⑥UBS証券株式会社×NPO法人 大塚クラブ 他
聴覚障害のある子ども等のためのプログラミング教室を開催

●ユースサポート奨励賞

⑦ギャップジャパン株式会社 福岡県近郊GAPストア ボランティアチーム
×認定NPO法人 エドゥケーションエーキューブ
Gapの古着だけを集めて販売する「職業体験型 Gap フリマ活動」等を開催



第5回『企業ボランティア・アワード』受賞企業のお知らせは、こちらのQRコードからご覧いただくことができます。

■選考委員

全国ボランティア・市民活動センター 副部長 小川耕平氏
立教大学 社会デザイン研究所 所長 中村陽一氏
東京都生活文化局 都民生活部 地域活動推進課 課長 山崎利行氏
日本国際交流センター 専務理事・事務局長 勝又英子氏

つぶやき ブレイク

vol.12



「ジ、エクストリーム、スキヤキ」
2013年作品 <http://ex-sukiyaki.com/>
前田司郎 原作・監督・脚本
©2013「ジ、エクストリーム、スキヤキ」
製作委員会
BD・DVD販売：キングレコード株式会社

ちぐはぐで、ゆるくて、 一瞬

洞口さん（井浦新）が突然会いに来て、大川（窪塚洋介）は怒っているのである。何年経ったと思ってるんだよ、ずっと音沙汰なかったくせに！と怒りをぶつけるのである。2人は学生時代にいつもつるんでいた仲良しグループの仲間どうしで、でも卒業を迎え、仲間の1人が死んだりして、気がつくとも15年も経っていたようなのである。

俺洞口さんとするむ気ないからね！などと大川は啖呵を切るのだがけれど、でも結局次の日だかには自分から電話をかけて、車あるんならどっか行かかね？とドライブに誘ってしまうのである。いい奴なのである。あまつさえ、2人して京子（市川実日子）の家を探り当てて会いに行ってしまうのである。やはり15年ぶりです感う京子は、どうやら洞口さんの元カノでもあるらしいのだけれど、まあ結局、京子と大川と、大川の年下の彼女・楓（倉科カナ）を乗せて、洞口さんが運転して、みんな海に向かっってしまうのである。

けだるい音楽にのせて冬晴れの光の中をゆくミニバン。そして現れる相模湾、青い水平線。なんといついともない浜辺での会話。

別々の場所で15年も生きてしまった3人は、気心が知れてはいてもどこかちぐはぐだ。楓は楓で、友達がいなくて海を見たことがなくて、だからいますこい楽しいです、などと真顔でつぶやいたりしている。だけど泊っていくのもアリだよな、などと誰かが言い出して、結局スマホで適当な宿を見つけて、風呂に浸かり、部屋飲みをして、感極まった大川が「なんか寝れね〜!!」とが叫んだりして、翌日にはとうとう見知らぬ公園の片隅でアウトドアすき焼きを4人は果たすのである。

洞口さんは実は、3人の知らないうところで、なにかとても重く受けて止めきれないような体験をしてきてしまったようなのだ。だからどうしても昔の仲間に出会って、そこからもういちど歩き出す必要があったのかもしれない。突然会いに来た理由を京子に訊かれても、洞口さんは決して明言しないのだけれど、そんな彼に、未来へ向かっていかなくちやね、と、諭すでもつきはなすでもなく伝える京子。

4人それぞれの過去と未来、時の流れを意識させるような会話

くりかえされるなかで、どうしようもない過去と、どうにかしたい未来とが、波打ち際のようにせめぎあって、瑞々しさと苦味とを交互に運んで来る、人生の諸相とも言うべきものが覗いている私の胸にもじんわり迫ってきて、洞口さんも、「映画を撮りたい」が口癖でアルバイト暮らしの大川も、会社の同僚と煮え切らない交際を続けてしまっている京子も、若さには似合わないくらい大きななかに負って生きていくらしい楓も、それぞれに違う色の過去と未来を抱えて、ただどゆる〜く心をよせあいつつ、一瞬のあいだいっしょにそこに存在していられる、人生の小さな奇跡を体現しているのである。映画だから、それがとても美しいのである。

噛み合わない会話、絶妙な間をふんだんに織り込んでゆるゆるに仕上げた前田司郎の脚本で、窪塚をはじめ4人の演技も絶品。ネット配信で400円ぐらいで観られるので、外出できない休日に、ゆる〜い時間を過ごしたくなったときなど、ぜひ。

（山口こずみ）



セルフヘルプグループとは、共通の悩み、問題を抱える人やその家族が自発的に活動を行う集まりのことです。このコーナーでは、セルフヘルプグループの思いや活動内容を紹介し、社会の認識を深めたり、他のグループの運営のヒントとなることをめざします。

「病名ではなく、生活の困りごととしてとらえる視点を」

第23回

難病の制度と支援の谷間を考える会

難病や内部障害、疾病等の当事者からなるグループである「難病の制度と支援の谷間を考える会」代表の白井誠一朗さんにお話をうかがいました。

はじまりの物語

当事者性の違いを超えた共通点

私は、指定難病である先天性ミオパチー*をもつて生まれました。この病気は早い段階から訓練をすると運動機能が保たれる場合もあるので、私も中学までは他の子どもと同じような生活を送っていたのですが、中学3年生の時、病気が進行した結果、呼吸不全や心不全を起しました。呼吸の力が弱まってしまったため気管切開をすることになり、日中は呼吸器を使わずに生活して、夜寝るときには切開したところから呼吸器を使う生活になったのが、15〜16歳の時です。短い距離しか歩けなくなり、外出時に車いすを使うようになり、移動の範囲が限られるようになったため、近所の大学へ進学し、「福祉制度を知っていれば、自分にとってプラスになる」という気持ちで社会福祉学科を選びました。ちょうど介護保険と障害者制度の統合について盛んに議論されていた時期で、DPI（認定NPO法人ディーパイ日本会議）や、JIL（全国自立生活センター協議会）などの「当事者団体」が様々な発信をして

いました。そういう動きを学ぶことで、日本の障害者制度は当事者活動と国などのいろんなやり取りの中で作られてきたのだと知りました。

大学卒業後、なんとなく内部障害や難病の人たちのおしゃべりに参加しました。そこで障害や疾病の種類は違っても、ニーズというか、困りごとが私と一緒にあることに気づきました。「疲れやすい」けれど「歩けているから（障害が）重く見られない」、「でも本当は結構大変」など、また、頸椎損傷の方が「私は見た目で障害があることはわかるけど、頸椎損傷のために体温調整がうまくできない。これは外からは見えない辛さだ」と語るわけです。そういう辛さや困りごとを共有できたことで、自分とは違う当事者性を持つ人とも共通することがあると知り、幅広い人たちとつながれる可能性を感じました。

支援の谷間という視点

ちょうど障害者制度改革推進会議の総合福祉部会で障害者自立支援法にかわる新法制定に向けた検討がされていたところ、私は大学院生でした。制度の谷間の問題がどうなるのかと関心があり、傍聴にも行きました。検討会では「骨格提言」という画期的な提言がまとめられました。結果的には障害者総合支援法でこれまでの身体・知的・精神に加えて新た

に難病等が法の対象となり、病名列挙による限定的な対象規定にとどまることになりました。その過程でもそも病名の問題ではなく生活の問題なんだ」という課題意識がありました。難病というとかく病名や医療の課題が全面に出がちですが、まずは難病の人たちの生活上の課題やそこから生じる制度の問題について一緒に勉強しようということで勉強会を開いたり、院内集会を開催したりしたのが「難病の制度と支援の谷間を考える会」の最初です。「谷間」についてですが、今はある程度制度が整ってきて支援や制度がある人たちも一定数いて、一方で何も制度がないという人も（以前より減ってはいますが）相変わらずいる状況です。ですが、問題意識の根本は、病名ではなく生活の困りごととして捉える必要があるということなので、「支援の谷間」という視点をもって活動していく必要があるのではないかと思っています。それで、会の名前を「難病の制度と支援の谷間を考える会」としました。2012年のことです。

総合支援法の課題の他、難病法制定の際にも、さまざまなきっかけをしてきましたが、情勢対応に追われ、組織としての十分な基盤がないまま活動を進めるには限界があります。話し合いの結果、私たちは「しばらく運動はやめよう」と決めました。基盤となる当事者のつながりが



くりをしていく取り組みにシフトしたということです。今も患者会はたくさんありますが、そこでは自分たちの病気の話を中心です。それも大事なのですが、病名を超えて互いの生活上の課題を話せる場が少ないのが問題だと思っています。また、多くの患者会では高齢化も進んでいて、若い患者さんは大先輩のアドバイスを聞くだけになってしまいがちです。頑張っても、「いや、きみ、就職できてるだけいいよ。僕らの頃はねえ…」みたいに言われてしまうと、いった具合です。患者同士の集まりは、本来なら共感してもらえ、就労してほしいのですが。一見、一般就労して問題がなさそうに見えるかも知れない人たちも、ある意味、孤立しています。しんどさが周りに理解されない、近くに仲間がいないという社会的孤立です。そういう人たちの居場所をつくりたいと思い、カフェのような感じで場づくりを

やってみることにしました。

カフェの雰囲気こだわって

2017年から取り組みを始めた「難病カフェ」は、開催時間を「営業時間」として、場所を提供する感覚でやっています。出入り自由で、特別な企画はせず、お客さん同士で話してもいいし、お茶を飲むだけでもいいというやり方です。状況によつては運営側がフォローすることもあります。基本的なスタンスとしては、来た人たちに自由にその場を活用してほしいと思っています。

難病カフェは、疲れた羽を癒せるような場所にしたいと、「とまりぎ」という名前にしました。最初の頃は、大学の教室や公的施設でやっていたのですが、最近是一般のカフェをレンタルしています。費用負担は大きいですが、場所のもつ力が難病カフェの雰囲気を大きく左右することに驚きました。会議室だと、放っておくと全然話しが始まらないのですが、普通のカフェでやるとお客さん同士が勝手に盛り上がりつつくれますし、集客もいいです。

新しい活動を支える

活動を広げていくという意味で、東京で開催すれば、いろんな所から

いろんな人が来て、それぞれが地元に戻って地域に難病カフェが広まる可能性があると思っています。

しかし「自分も難病カフェを始めたい」という相談を受けたとき「僕らの場合は…」という自分たちの経験は話せませんが、それだけになってしまいます。活動を始めの方が最初に困るのは、場所探し、その次に仲間集めです。カフェの数だけ「こうやった」という経験があるので、それを共有できれば難病カフェ立ち上げの「ノウハウ」が蓄積されていくと思えました。また、参加者を含めた運営の共通ルールを考えることや、いざという時に相談できるつながりづくりなども悩みの種でした。そうしたこともあって昨年から、難

病カフェのネットワーク化に取り組んでいます。いま「難病カフェ」の名称で開催されている活動の形態や中身は様々で、共通の基盤があるわけではありません。このネットワークでは「難病カフェとは何なのか」ということを含め、難病カフェが「大事にすること」や「外せないポイント」を見出ししていきたいと思っています。一人ひとりの「やってみよう」を促進できるネットワークを目指しています。

*筋組織の不全により筋力低下や運動発達の遅れなどの症状がでる。

森 玲子(相談担当)
佐藤 新哉(編集部)

難病の制度と支援の谷間を考える会

キーワード 難病／内部障害／疾病／難病カフェ

<https://www.facebook.com/tanima.nanbyocafetomarigi/>

https://twitter.com/tanima_net

2012年に難病の福祉問題を理解するための勉強会としてスタート。病気や障害の違いにかかわらず支援を必要とする人が排除されず、必要な支援を受けながら社会参加できる社会を目指して活動している。難病にかかわる制度・政策に関する学習会や交流会の他、不定期で「難病カフェ」を開催するとともに、当事者や団体のネットワークづくりにも取り組んでいる。

メンバー 様々な難病や疾病、内部障害等の当事者

活動内容 学習会およびシンポジウムの開催、難病カフェの開催、難病カフェ主催者のネットワークづくり等

活動エリア 東京 **相談** あり

集まれる場 あり

読者の声

～本誌364号より～

読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆特集：学校の今 part 2

地域で支える体験学習と課外授業

・地域の良さを十分に発揮し、学校と地域がつながりあう地域社会がこれからの教育では必要であるため、杉並の事例が多く地域に発信されていくとよいですね。

・今、高校に通っています。小中学校に比べて地域の方と話す機会が減りました。ボランティア部のおかげで、同じ区内の方とお話する機会があります。高校でも地域の方とつながることができるといいですね。

◆あすマネ・ボランティアへの感謝の気持ちの伝え方

・高校でボランティア部の顧問をしています。施設の方や利用者様より感謝の言葉をいただくことが多くあります。こちらこそ勉強をさせていただいており、感謝の気持ちがあります。加えて部活に参加する生徒にもお礼を言うようにしています。

◆思い立ったがボラ日：手編みの鳥の巣を届ける会

・ふわふわのドーナツかと思ったら糸で編んだ手編みの巣に、本当にヒ

ナが入っていてびっくりです。

・ボランティアには行動力が必要。というイメージがありますが、編み物なら始めやすそう、と思いました。

◆特別企画：モノ言うTシャツ

・楽しい企画。いろいろ言いたくてしかたのないTシャツが、すてきなデザインで収まっていて興味深かったです。

◆TVAC News

中高生のボランティア団体

VIOLLET!!

・私も所属しているVIOLLET!!の記事だったのでびっくりしました。VIOLLET!!は、縦も横もつながりが深まります。都内の高校生で、ボランティア活動をやりたいと思っ

◆いいものみい〜つけた!〜

ちゃんこめ作業所

・福祉作業所施設における自主製作品を紹介することに、とても賛成です。区内の関係施設の方から、自主製作品が利用者様の収入源にもなると聞きました。私もできる限り、このよ

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<http://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

会議室 会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料
※会議室AB通し(80人)
貸出機材 印刷機(2台)紙持ち込み、点字プリンター 他
申込み 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

火曜日～土曜日: 9時～21時 / 日曜日: 9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 出口B2b)
飯田橋駅下車

ネットワーク

は、ボランティア・市民活動を広げ、
応援する情報誌です!

【次回予告】2020年5月下旬発行予定

特集 性差別と生きづらさのない社会をめざして(仮題)

発行人 山崎美貴子

編集委員 五十嵐美奈(興望館)

上杉貴雅(オレンジフラッグ)

江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)

齋藤啓子(武蔵野美術大学 造形学部教授)

シュール大学 社会学ゼミ(東京シュール シュール大学)

中原美香(NPOリスク・マネジメント・オフィス)

まつばらけい(フリーライター)

渡戸一郎(明星大学名誉教授)

編集・発行: 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL: 03-3235-1171 FAX: 03-3235-0050
E-mail: nw@tvac.or.jp

印刷: 株式会社丸井工務社

デザイン: 東京ボランティア・市民活動センター/株式会社丸井工務社

表紙イラスト: フローラル信子

2020年3月20日発行(通巻No.365)

ISBN 978-4-909393-19-7 C2036

371円+税

本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



いいもの みい〜つけた!



1

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

Vol.
24

社会福祉法人つむぎ おだまき工房

「おだまき」(就労継続支援B型)は29年前の開所以来、[裂き織り]を主とした仕事をしてきました。織り手は10~80歳代の様々な障がいのある個性豊かなメンバー約30名。[ヒト・モノ・トキ]を大切に地域の方々よりいただいた着物をほどこき、細く長いひも状にし、織り機で一段一段丁寧に織り込みます。着物の柄が面白く変化した反物を縫製し、新しい息吹を吹き込んだすべて1点物の作品を、ぜひ多くの方に見て、使って、楽しんでいただきたいです。春は国立(本年は7月予定)、冬には吉祥寺のギャラリーでの展示会や、おだまき工房で行われる個人展も最大のイベントです。モノづくりを通してつながる人との出会いを大切に、日々トントンと心地よい音を奏でています。



2

社会福祉法人つむぎ おだまき工房

所在地 〒187-0031 東京都小平市小川東町 4-2-1
小平元気村おがわ東

TEL 042-346-4530 FAX 042-346-4530

E-mail odamaki@io.ocn.ne.jp

HP <http://odamaki.jimdo.com>

<https://www.facebook.com/odamaki.tumugi/>

1 *バック*様々な工程を経てできた時の喜びはひとしおです。

2 *雑貨*さき織りを活かした雑貨たち。新作も続々登場。

3 *ポーチ*スマートケース、ペンケース、ティッシュケースなども。

4 *藍染め*多くの人を魅了する美しい藍色。防虫・解毒効果も。



3



4

社会福祉法人清水基金

社会福祉法人・NPO法人への建物・設備等の整備を支援する助成事業や、職員の方々の研修事業を通じて、障害福祉サービスの一層の向上を目指しています。
※2020年度は「文化芸術活動特別助成事業」を新設しました。

2020年度 助成事業・研修事業を募集しています。

社会福祉法人助成事業

対象

障害者福祉の増進を目的として運営されている社会福祉法人で、2020年4月時点で開設後1年経過した事業所

申込期間

4月20日～6月12日（郵送必着）

内容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
※総費用に対し、30%以上は申込法人負担
- ・助成金額 1法人1件、50万～1000万円
- ・決定時期 2021年1月末

NPO法人助成事業

対象

障害者福祉の増進を目的として運営されているNPO法人で、2020年4月時点でNPO法人になって3年経過し、開設後1年経過した事業所

申込期間

4月20日～6月12日（郵送必着）

内容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
※総費用に対し、20%以上は申込法人負担
- ・助成金額 1法人1件、50万～700万
- ・決定時期 2021年1月末

海外研修事業

対象

- ・社会福祉法人・NPO法人に所属し、障害福祉サービス等に従事しており、海外の障害福祉等から学ぶ課題を持ち、意欲的に挑戦する方
- ・実務経験5年以上、年齢25～60歳

申込期間

5月15日～6月30日（必着）

内容

- ・募集人数 6名
- ・助成金額（1名当たり、予定）
3ヵ月コース 200万円
1ヵ月コース 100万円
- ・決定時期 2020年10月
- ・研修期間 2021年4月～7月
- ※派遣を延期した2019年度研修生と2期合同で派遣する予定

文化芸術活動特別助成事業

対象

障害者福祉の増進を目的として運営されている、2020年4月時点で開設後1年経過した社会福祉法人の事業所、及びNPO法人で2020年4月時点NPO法人になって3年経過し開設後1年経過した事業所（グループも可）

申込期間

4月20日～6月12日（郵送必着）

内容

- ・助成物件 障害者の文化芸術活動（美術・演劇・音楽・舞踊等）に必要な道具・楽器・機器・活動をまとめた出版物等
※総事業費に対し、10%以上は申込法人（グループ）負担
- ・助成金額 1法人1件、30万～200万円
- ・決定時期 2021年1月末

新設

※詳細は清水基金ホームページをご参照ください。⇒ <https://www.shimizu-kikin.or.jp/>